

スペイン革命におけるCNT (9)

ホセ・ペイラツ

今村 五月 訳

第十章 革命と戦争のディレンマ

混乱の時が過ぎた八月初旬、激戦の終熄と同時に、連合とアナキズムの組織的活動が姿を見せ始める。

労働復帰命令が出されてから、各組合は会社の経済体制変更の事業にその精力を爆発させた。どの委員会も戦術的、外交的、政治的な配慮にあまりにもとられすぎていた。そういう偶然的な、ある程度までは虚構でしかない懸念には無関心だった組合の方は、恒久的な勝利を目ざしていた。二つの道のいずれがより確実であるかは時間が遠からず示してくれるだろう。すなわち、権力の頂点をねらう政治的立場に進むか、生産の場を放棄しないか、のいずれかを。第一についてはCNTは失望と挫折と徒勞を得るだけだろう。政治的に言うなら、CNTの勝利はすべて、一日の、あるいは数カ月のあだ花でしかなかったのである。

七月下旬、CNT全国委員会は最初の声明を発表した。

「スペインの連合系全組合員とイベリア半島の全アナキストへ——サルド〔健闘を祝す〕。友よ、今は議論の時ではない。ファシズムの野獣はまだ完全に倒されていない。だが、労働全国連合・全国委員会は各地の戦線における戦闘の進展を報告するため、諸君に対し発言をする。

最初から我々の勇敢な同志たちは正義と自由のためにすべての情熱を献げた。軍部の反乱が起きる数時間前、周囲に人員がいなくなったのをみて、我々の組織（全国委員会、地方委員会、防衛班等）は、異常な敏速さで実質兵力の総動員を指揮下におく処置をとった。全国にわたって地方委員会の全部に代表が派遣された。こうして我々に行動の時がやってきた。そして、初めのうち我々は革命の英雄的兵士だった。戦う武器も持たずに我々は自由のために生命を献げたのだ。軍部—ファシスト反乱の最初の数時間に、我々は兄弟の血をもって反徒の通過を阻止するバリケードを築いた。これを要するに、最も困難なことを可能にする気高い情熱をもって、すでに銃をとった同志たちは、一部軍部に支えら

れたファシストが抵抗を続ける地区に対して、旋風のように突進したのである。

ラ・モンタニャ、マドリッド、クアトロ・ヴィエントス、ヘタフェ、アルカラ、ガダラハラの兵管で、CNTとFAIは革命の栄光に包まれた。我々の兄弟がすべての人民と手を結んで打ちたてたものは、決して消え去ることのない大偉業の一つである。軽視、生命に対するひどい軽視、敵の銃弾をわが胸で受けようとする悲願。我々に感動の涙を流させた何という聖なる狂気であったことか！

我々の兄弟はどんなに注意深く銃を扱ったことだろう！それは燃えるような戦闘力をあますところなく具現していた。それを手にとる時、彼らには一個の現実というよりも夢のように思われたものだ。

血は奔流となった。倒れた同志は数えきれない。これはマドリッドについてだが、スペインの他の地方でも同様に、我々の戦列における犠牲者は数知れないと思う。

スペイン・アナキズムの皆であるカタルニャは、勃発した戦争において決定的な要因だった……。大部分我々の組合部隊に属する四百人が、力を使い果たして生命を失った。バルセロナから入手する情報は、CNTがなければファシスト反乱を制圧することは不可能だったろうと我々に思わせる。ファシストの逃亡者は、敗北前にカタルニャ全土で多くの犠牲者をだした。バルセロナ市街は再び、今度はさらに濃く、朱に染まった。ファシストの野獸がもつ狂暴さは我々から少なからぬ闘士を奪い去った。彼らは、マドリッドやレヴァンテやカスティリヤで倒れた者たちと同様、

我々の灯台だった。その輝きたいまつが、彼らの生命ゆえに消えざらんことを！スペイン・ファシストが一人でも存在する限り銃声の絶えざらんことを！

彼らは荒唐の種を播き、中世の野蛮を復活し、スペインを現代の要請に従わせようと切望する自由の精神に鼓舞されたすべての人々を処刑しようと欲していた。そしてその残忍と労働者組織に対する狂暴な憎しみとは、成功するにちがいない陰謀を彼らに秘かに計画させた。もし彼らが勝利していれば、すべてが崩壊していたであろう。スペインは墓場と化していたであろう。剣と十字架はいベリア全土に君臨し、我々の歴史の暗黒の時代——狂信的な憎と血を好む軍隊長の歴史——が復活したであろう。幸運にも地平線は晴れてきた。最近の情報は我々に好ましいことを伝えていた。ファシズムの敗退はもはや数日中の問題である。そして二度と再び起ち上ることはないだろう！武装した人民がそれを破産させ、我々の歴史に深淵を作ったのだ！この淵は思想的内容によって、精神性によって埋められなければならない！今日の熾烈な闘争の中で獲得された勝利を確実にし、我々の勝利を半島全体に行きわたらせなければならない！

アンダルシアにはまだ小さい紛争点が残ってはいるが、共和国派の軍隊と労働者組織の主要な核とによって包囲されつつある。サラゴサは陥落するだろう！連合の名誉とスペイン・プロレタリアートの高らかな志気がそう叫ぶ！もしサラゴサに弾雨を降らせなければならないのなら、我々はそうするだろう！CNTはそうするだろう！不滅のサラゴサはそうするだろう！それは常に自由の反旗を高く掲げ続けることを知っていたのだから！

褐色の広大なカスティリヤもファシストに対して戦っている。

カスティリヤ高原に深く入りこんだいくつかの地方では、僧侶や大地主やその他の吸血鳥どもは、共和国派の部隊の兵士たちの銃弾を胸に命中させよとばかり力で住人たちを先頭に立たせた。これは、確実な敗北の前兆である彼らの不信と意気消沈の状態を示すものである。ブルゴスやアヴィラや、カスティリヤ以外の他の諸地方も、早々に敗退するだろう。そして、そうなれば、裏切者たちは寛容を期待することはできない！何者にもそれはありえない！決着をつける時である。それは全面的、絶対的である。

それは、流された血、犠牲になった生命、受けた苦悩、被った恐怖、昨日の、今日の、そして日々の拷問の代償を要求する。我々は戦い続けよう、銃を捨てまい！まだ紛争点の残っている所で、もし必要なら、石一つ残らぬまでに破壊しつくそう！完全に叩きつぶそう！我々を倒すことばかり考えて戦闘へと突進した者たちを倒そう！まさに交戦中らしく！

自由共産主義、万才！不滅のCNT万才！——全国委員会——マドリッド、三六・七・二八！

カタルニャでは革命の装置は全力で燃焼した。八月二日に決められたバルセロナ統一組合地区連盟大会は、当日の議事でこう問いを発した。「組合は、組織が掌握している生産の場の社会化を我々が指導しなければならぬこと、また、実際に統制されなければならぬことを、どう考えるか？」同じ日に開かれたFAIの地区ならびに地域グループ大会は宣言した。

「アナキストは反ファシズム委員会に加わり続け、最後に人民が二重の犠牲になるようないかなる政治的私慾にも戦闘が墮する

ことなく、精力的で徹底的な段階に維持されるよう、常に働きかけなければならない。

同様に、大会は、開始された戦闘の一面だけに限定されて我々の運動が停滞してはならないと宣言する。

完全に破産したブルジョア経済と、政治的、社会的に失敗した民主主義とは、もはや自力の解決を失っている。そして労働者諸組織、なかならずCNTとアナキズム運動とは、ともに経済的再建の事業に全力を注がなければならない。その事業は、集産化から土地、鉱山、産業の社会化に至るまで進むべきである。」

他の地方における革命運動についての情報が不足していたため、カタルニャが革命的意味において最も確実な決定をし、要求することになる（レヴァンテは襲撃によって兵管の不安をとりのぞいたばかりだった）。この懸念はカタルニャ連合地方委員会の次の文書に表明されている。

「カタルニャ地方委員会は、先週日曜日に開かれた地区ならびに地域大会の後、地方の現状を考慮して、全国委員会に報告するためマドリッドに代表を派遣することを決定した。

また、他の諸地方からの情報を受け取った。何人かの同志の性急さについて話し合われた。彼らはファシズム打倒においてさらに前進しようとしている。しかし、現在のところ、スペイン全土における状況はかなり微妙である。革命に関してはカタルニャはスペインにおけるオアシスである。

現在なお抵抗する反動によって支配されているスペインの地方が征服された場合に、内戦を通じて起こりうる変更を予測することが誰もできないことは明らかである。」

カタルニャは急速に革命のオアシスではなくなっていく。八月上旬、中央政府は一九三三年、一九三四年および一九三五年の予備兵の動員を命じる政令を発した。カタルニャの青年はオリンピックシア劇場に集まって兵營復帰拒否を宣言した。CNTは長文の声明でこの運動を支持し、次のように述べた。

「マドリード政府の政治的展望の欠如は労働者組織にある困難な問題を提起する。バルセロナの街路はかつて——一九三三年、一九三四年、一九三五年——予備兵だった青年たちで溢れている。彼らは、将校は信頼に備せず、従って、当然、兵營の軍隊という古い概念からは解放されたと考えているので、兵營に復帰することを拒否しているのである。

彼らは自発的な衝動で兵營を放棄し、軍服を裂き、『軍隊を倒せ！ 民兵万才！』と叫びながら示威運動を組んだ。

これら大量の青年はすでに民兵隊に登録している。残る者も、登録して直ちにサラゴサへ出発する意志を表明した。

とにかく、かつての運動に参加した軍人たちの裏切りの後では当然の態度なのだが、彼らが欲しないのは、軍規に服し、かつての上官の命令の下に置かれることである。

これは微妙な問題である。そして、反ファシズム民兵委員会は注意深くかつ現在を明確に理解して、これを見なければならぬ。人民は、いたずらにすべてが以前あったと同じように存続するために、七月十九日が予測した解放へのすさまじい努力を払ったのではないのだ。我々を過去につなぐへその緒は永遠に断られた。社会的義務、人間生活、権利、そして自由の、新しい理念が要求されている。

一方、これに先だって開かれたFAIの地区ならびに地域大会は、この問題に関する態度を決定している。

「今日二日、バルセロナに招集されたFAIの地区ならびに地域グループ大会は、開始された内戦の欠くべからざる必要として、民兵隊の既成事実を承認する。大会は、民兵隊の軍隊化に反対する。しかしながら、あらゆる戦争に不可欠の、行動における組織化の必要は理解するものである。」

『ソリダリダッド・オブレラ』は八月六日の社説で同じ問題を扱っている。

「……軍隊は国民の脅威だった。それは軌道を逸した事柄に介入した。どの大臣も、在任期間が短いか長いかは將軍と將校にかかった。防衛フンタの歴史は、専横なヒェラルキーを望む人物どもの野心が最もよく立証された例である。防衛フンタの創設者であるマルケス大佐は、それが冒険家と追従屋の一団に墮落したことを知っている。そして、当のマルケス大佐まで、彼がこの欠陥だらけの屠殺夫という職業を清潔にしようとしたとき、軍隊の彼の仲間たちから猛々しく迫害されたのである。他方、スペインが海外の植民地を失って以来、実に大量の將校団という永遠の問題が残された。それはスペインの予算の大半を吸い取っている。思いきった処置がとられるべきだ、また、わが国にはわが国以上の大國を維持している軍隊に存在する兵員をはるかに上回る將校がいる、と、新聞や演壇から再三語られてきた。正規軍の今日までのこの異常な肥大を考慮して、蜂起した軍人の提供することの願ってもない機会を利用しなければならぬ。將校団は大部分が蜂起した。残る軍人の剣の上に再編成することは不可能である……」

我々は、それら一万の若者たち、人民の息子たちのすばらしい光景を見た。彼らはオリンピックシア劇場に集まって、堂々たる集会において、勇敢であることをやめることはできないと全員一致で決議した。彼らは言った。『我々は市民として革命家としての我々の義務を逃げるのではない。我々は兄弟を解放するためにサラゴサに行くことを望む。我々は自由の民兵であることを望む。しかし、我々は制服を着た兵士にはならないであらうし、なることはできない。正規軍は人民にとって危険だったこと、人民の救済、市民の自由の救済は唯一絶対に民兵隊にあることが明白に示された。我々は民兵隊に行く。前線へも。しかし、以前のように、兵士として、人民の力の発現でない規律と命令に従う兵營へ行くことは否、である。』

CNTは、力と情熱をもってなされた高貴な意志の表明を無視することができない、また聴き逃すこともできない。昨日オリンピックシア劇場に集まった兵士たちは、人間性をもたぬロボットとしてではなく、集団の行動に必要な規律を自由に遵守する自由な人間として、民兵の資格で兵營に入り、かつ出入の自由を持てるなら、いつでも各自の部隊に復帰することまで契約した。

そして、カタルニャのCNTは、マドリード政府と同じくヘネラリダッド政府に対しても、単純な質問を提出しなければならぬ。我々は、制服を着た義務的な正規軍の存在を擁護することも、その必要を理解することもできない。この軍隊は、自由が情熱をもって守られ、新しい陰謀が秘かに孵化したりしない唯一の保証である民兵隊によって、武装した人民によって、交替されるべきである。」

正規軍は労働者民兵によって補充されなければならない。彼らは独力で現在の責任を果たすことができる……」

カタルニャ民兵委員会はすぐに覚書を発表し、その中で、ヘネラダッド防衛評議会と協定して、民兵委員会の権限の下に兵營に動員されていた青年たちの即時帰營を決定した。同委員会の委員だったサンティリヤンの手記は、バルセロナの民兵総司令官は、第九歩兵部隊の兵營、現在の「バクーニン兵營」に置かれていたと述べている。旧軍隊の技術職員は、民兵委員会に参加している労働者組織と政党とがその配属に責任をもっていたが、彼らの職務の活用には便宜をはかるため、兵營の事務所に出頭しなければならなかった。

我々は、中央政府の動員令に続いてバルセロナで起きた人民の反応をすでにみた。召集された青年たちが、上官の裏切りと政府の無能によって放棄されたばかりの兵營に復帰することを拒否したのは何によるかを見た。そしてまた、反ファシズム民兵委員会からCNTとFAIが引き出した妥協の結果もみた。この解決は、カタルニャに軍事的自治を宣言することを内容としていた。反乱制圧後に成立した第一次ヘネラリダッド政府に初めて防衛評議会（ディアス・サンディノ）ができた。民兵として動員された青年の兵役登録という苦肉の策は、カタルニャ自治政府の意図に反するものでは決してなかった。八月六日に出された民兵委員会の覚書はこう述べている。

「カタルニャ反ファシズム民兵中央委員会は、一九三四年、一九三五年、一九三六年兵の即時帰營と、中央委員会の権限の下に設置される民兵委員会の処置に従うことを決定した。」

しかしながら、引き続き兵役の活用には便宜をはかるために、待命中の補充兵全員（その身分に関しては民兵委員会に属する労働者組

織と政党が責任をもっていた)が必要となったので、将来の軍隊の指揮官あるいは技術者のための統制機関を設置する必要が生じた。これらの機関は労働者兵士評議会と命名され、ロシア革命の初期の間に創設されたものと同じ目的をもつ組織だった。そういう評議会は武装部隊のすべてに広がったが、兵営では兵士と諸組織ならびに政党の代表とからなる委員会形式の下で機能した。

連合の古参の闘士であり、労働者兵士評議会の勇士であったアルフォンソ・ミゲルは、一九三七年半ばにこう書いた。

「CNTとUGTの協定によって最初の労働者兵士委員会が発足した。それらはバルセロナで誕生した。続いてすぐに、レヴァンテ、アンダルシア、そして敗北主義と隠れた裏切りによって志気沮喪したあの首都でも、設立された。統制と粛正が始まった。委員会は、志気を高揚し、確実な陰謀を取締り、疑わしい命令を監視し、すべての有能で誠実な分子を援助するという、巨大な事業を背負った。委員会によって軍事行動は救われ、国内のファシズムを封じ込めることができた。委員会がなかったならば、ファシズムは間違いなく我々を食いつくしたであろう。戦争初期のあの苦難の時期に、一体誰が、裏切りで志気沮喪し、戦闘で一割を失った軍隊——言葉の最小限の意味で——と武装部隊とに人民を結びつけることができたろうか？ レトリックの製造は問題ではなかった。委員会の創設は、戦闘を続行し、戦闘命令の決定全般への最も絶対的な信頼を得る必要から、決定されたのである。したがって、何はともあれ、全体的混乱の真只中でとにかく統一のとれた指導が、命令決定のある場合には多目的な統制、他の場合には実地的な統制を通じて、維持されえただった。そして、こ

れなくしてはいかなる決定も不可能だったであろう。労働者民兵は責任ある指導部を必要としていた。そこには、各戦闘部隊によって選ばれ、『責任ある唯一の忠実な指導部の下に団結して戦う……』という同一の目的をもつ純正な分子が参加することができた。情勢がその創設を決定した。同じく情勢が発展して後に民兵の交替を決定した。反軍国主義的人民によって、彼ら自身のかつての軍隊に対する全面戦争の中で、鍛えられつつ、スペインに新しい戦闘組織、人民革命軍が生まれたのだった……」

八月一日、バルセロナのオリビシア劇場で一大集会が開かれた。七月九日の事件以来初めてのものだった。カタルニャ地方労働連合書記局代表マリアノ・R・ヴァスケス、CNT代表フランシスコ・イスグレラスおよびガルシア・オリヴェル、イベリア・アナキスト連盟代表フェデリカ・モントセニイ、以上が演説した。集会は全スペインに放送された。ここに討論の最も主要な部分を引用する。

「ヴァスケス——反乱三日後、我々は、生産の全エネルギーに水路をつけるという目標のために、操業が不可欠になっていた全産業において、労働復帰を発令した。そうすることによって我々の組織の建設的能力を示威した。続いて、経済最高評議会の設立をなしとげた。それはCNTとFAIが構成している。この機関は生産を正常化し、引き続き研究を行なった後、社会化を実施することを目的としている。この困難の時にあって、CNTは労働者階級を満足させ、眩惑させるために請願することが好都合だとは考えない。四〇時間労働と五〇パーセントの賃上げを要求してねり歩く時ではない。否。ファシズムを徹底的に打倒し、ロシア革命が経過した苦悩と悲愴の時期を経験しないために、現在働

いている以上の時間を働かなければならないのなら、働こうではないか。我々の革命的義務は、人民の最も緊急の必要が必ず補われるように注意することである。国際的には、我々は、おそらくそれを望んでいる者のいる外国の干渉によって脅かされている。我々は、ファシズムに利益を与え、戦争を開始するこれらの干渉を正当化するための口実が求められているのを知っている。だがしかし、我々はこの干渉にいかなる口実も与えない。また、何者も、我々が外国の利益を尊重しなくなると言うことはできないだろう。領事たちが我々を訪れたとき、我々は、誰も干渉することがないよう、直ちに外国の会社に保証を与えた。そして、望まれば、それら外国の利益を尊重しなくなる者のないようにと、我々の警備隊を派遣することまでしたのである……七月一九日は、二度と帰らぬ過去を振り捨てた。現在提起されている諸問題は、この時点に応じた最高の視点から解決されるべきである。でなければ、敗北主義者とデゴグたちの精神に特有な党派的でない貧しさが障害となるだろう。我々CNTとFAIは、いかなる口実の下であれ、人民を武装解除しようとすることを許せない。武器はブルジョアジーの手にあるよりは労働者の手にある方がいいのだ……」

「ガルシア・オリヴェル——マドリード政府は、あることが革命の精神をもたない軍隊を、ファシズムと戦うためにつくることのできると考えている。軍隊は人民の声から出る表現以外の表現を持つべきではなく、百パーセント、プロレタリアの精神を精神とすべきである。これを証するため、私は、突撃警備隊と密輸監視隊と治安警備隊とが反ファシズム闘争において労働者大衆

と合流し、事実が示したとおり、人民に背いて組織された武装部隊という古典的概念を越えた人民軍を、彼らとともに創ったということを指摘しなければならない。民兵から出発した人民の軍隊は新しい理念に基づいて組織されなければならない。技術指導部の訓練を我々が行なう革命学校を組織しよう。その指導部は旧将校団を模倣したのではなく、しかも、人民とプロレタリアートへの忠誠を表明した教官に従う率直な技術者のようなものである。これはファシズムが我々をのみこまないための最も絶対的な保証である。なぜなら、ファシズムは、分散してはあらゆる種類の努力と生命を浪費するだけではない我々の善意よりも、一層すぐれた軍事技術を有しているからである。我々は、スペインが我々の決断に共鳴し、また、自由を愛する我々全員の切望する未来社会を防衛するこの新機構を採用するよう、期待する。私は、カタルニャにおいて治安警備隊、突撃警備隊、密輸監視隊によって示された精神を称賛する根拠に事欠かない。それらは兵営で労働者兵士評議会の設立を決め、創設した。これによって我々はロシアの経験を迎えるのだろうか？ 否。スペインはロシアの先例に従ういわれをもっていない。我々は人民の防衛に必要な機関を創設する能力をもっている……」

「フェデリカ・モントセニイ——私たちは他の反ファシズム諸党派と結んだ協定に忠実ではあるでしょう。しかし、私たちがまた忠誠を要求します。私たち各々の勢力に理解と寛容がなければ、私たちは崩壊するでしょう。それを避けなければなりません。私たちは、革命の経済的再建に必要な非常に多数の産業が放棄されたことによって、私たちが目ざしたよりもさらに速く進

むことを余儀なくされています。最小限にそれを利用するためには、私たちは放棄された責任を負いましょう。技術者を味方と呼びましょう。彼らがその科学的精神の最大の満足と、その生活の必要の最大の権利と保証とを共同作業のうちに見出すことを確信して、共同の事業に協力するように。共和主義者、私たちの理想とは違う社会発展の理想をもつすべての人々よ、この厳肅なる時の巨大で重要なこの諸問題をよく考えて下さい。私たちは私たちが越えて進み続けるでしょう。他の人々が無理解と悪意からそうしないのなら、罪はその人々のものではないでしょう……。私たちは集産体による個人の最大限の自立に基づく新世界を建設するでしょう。しかし、私たちが生活のあらゆる面で後退だとみなす中央集権主義に対しては、新世界は個人の自立に常に密接に結ばれるでしょう……。」

同八月一〇日には革命的秩序の確保のために任命される統制パトリール部隊の構成計画が発表された。計画案によると、このパトリール部隊は「革命そのものから唯一それへの奉仕のためだけに生まれた純粋に革命的な機関である」。それは反ファシズム戦線の種々の組織に属する七百人からなり、協定された比率で構成され、一支部に分かれていた。すなわち、カスコヴィエホ、アラゴン・ムンタネル、バルセロナ東北部、セコ村・カサ・アンツネス、サン・オスタフランチス、ボナノヴァ・ペドラルベス、グラシア・ア・サン・ヘルヴァシオ、クロト・ポブレト、オルターカメローギナルド、サン・アンドレス、マエヴォ村であった。全体を構成する七百人のうち三二五人がCNTに所属していた。残りは比率の順にエスケラ、UGT、POUMに分けられていた。

一三日、ヘネラリダットの政令により、カタリニャ経済評議会は公的資格を付与される。ここに政令の原文がある。

「スペイン全土に生じた騒乱の結果、カタリニャが蒙った破壊は、カタリニャ経済を適切に構成し正常化し、結果的に生じた深刻な諸問題を解決するために、可及的すみやかにカタリニャ経済評議会設置に着手することを勧告している。同評議会は、カタリニャの全労働者人民の熱狂的協力を得てファシズム運動に対してともに戦い、わが国土の経済復興とともに努力しなければならなかった諸政党ならびに労働者諸組織の代表によって、構成されなければならない。よって、経済ならびに公共事業大臣の提案により、行政評議会の同意を得て、発令する。

1、経済評議会が創設される。その権限はカタリニャ全土に及び、カタリニャの経済生活の指導機関を構成するであろう。

2、経済評議会は、必要と考えられる補助機関と、カタリニャ全土における経済の正常性を確保するための規程を、あらかじめ決定するであろう。

3、評議会は以下のようにして構成されるであろう。

経済ならびに公共事業大臣を議長とする。彼は最も適当と考えられる人物に代理を委任することができる。

評議会の議決権を有するメンバーは、以下のとおり。カタリニャ共和主義エスケラ党代表マルティン・バレラ・イ・マレスマ、ヴィセンテ・ベルナデス・イ・ピウサ、ファン・B・ソレル・イ・ブル、共和主義カタリニャ行動党その他の左翼諸政党代表ラモン・ペイボチエ・イ・ピ、CNT代表エウセビオ・C・カルボ、ファン・P・ファブレガス、コスメ・ロフェス、FAI代表アン

トニオ・ガルシア・ビルラン、ディエゴ・アバド・デ・サンティリヤン、UGT代表ファン・フロンホサ・イ・サロモ、ファン・グリハルボ・イ・セレス、ファン・ブイグ・イ・ピデモンツ、ラバッサイレス連盟代表ファン・ポウ・イ・マス、マルクス主義統一労働党代表アンドレス・ニン、カタリニャ統一社会党代表エスタニスラオ・ルイス・イ・ポンセティ。

バルセロナ、一九三六年八月一日——(署名)ルイス・コンパニイス——経済ならびに公共事業大臣(署名)ホセ・テラデリヤス——

当時のもう一つの政令は革命的教育指導に関するものである。ここに原文がある。

「人民の革命的意志は、信仰告白的傾向の学校を廃止した。いまや、労働と人類の兄弟愛との合理主義的原理に鼓吹された新しい学校の時代である。この新しく統一された学校は、単に人民が廃止した学校に交替するばかりでなく、世界的連帯感に激励され、人類社会のあらゆる不安に一致し、あらゆる特権階級の廃絶に基づいた学校生活を創造するように構成されなければならない。

よって、文化大臣の提案により、行政評議会の同意を得て、発令する。

第一条 新統合学校委員会が設立された。これは次のことを目的とする。

a、ヘネラリダットによって収用された建物において、信仰告白的傾向の学校に代わる統合学校の新教育制度を組織すること。

b、この新教育制度に参加し指導すること。人民の意志によって要求される新制度にあらゆる面で応えること。すなわち、労働の

異議の手帳

四五折

合理主義的諸原理に示唆され、才能のあるすべての労働者が障害なく、だがあらゆる特典を排して、初等学校から最も進んだ研究、労働者大学とバルセロナ自治大学まで行くことができることを保証する。

c、この委員会は国家、バルセロナ市庁、カタリニャ・ヘネラリダットの教育事業に共同して参加するであろう。

第二条 委員会はヘネラリダット文化大臣により、また、以下のカタリニャ諸組合組織の派遣する人物あるいは代表によって治められるであろう。UGT(教育労働者スペイン連盟)代表カイエタノ・デルオム・イ・ブルゲス、ホセファ・ウリス・ピ、ファン・エルヴァス・ソレル、フランシスコ・アルベルト・マルガト、CNT(自由業組合)代表ミゲル・エスコリウエラ・ギタルテ、ファン・ブイグ・エリアス、ファン・P・ファブレガス・リヤウロ、アルベルト・カルシ、文化省ならびにカタリニャ・ヘネラリダット師範学校代表カシアノ・コスタル・イ・マリネリョ、バルセロナ自治大学代表セラ・ウンテス博士、産業大学委員会代表ファン・アレウ・ポトクサカ、芸術学校代表フランシスコ・A・ガリ。

第三条 委員会はよりよく機能するために次の部会に分かれる。

a、初等教育部会 b、中等教育部会 c、職業教育部会

d、高等教育部会 e、技術教育部会 f、芸術教育部会

第四条 諸部会の提案はすべて委員会の大会で討議されるだろう。その実施のため各部会の議長からなる執行委員会が設置されるであろう。

暫定項目 緊急の第一措置として、新統合学校委員会は、ヘネラ

リダッドが収用した建物およびそれらの内部で発見され、人民の財産とされた物品に与えられるべき運命を、検討するであろう。同様に、すべての建物とそれが所有する物品との保護を早急に組織するであろう。また、この使命を完うするために、常に民兵の協力が与えられるよう要請するであろう。

バルセロナ、一九三六年七月二七日、ルイス・コンパニニス
——ヴェンツラ・ガソル

騒然たる八月の最も重要な事件の一つに触れて、この章を閉じることにしよう。

UGTは実質的にはカタルニャに存在していなかった。革命の危険は、すべての政党と組織に洪水のような大量の分子を運びこんだ。彼らの中には、自分の政治的傾向に反して庇護を求めていった連中に事欠かない。プチ・ブルジョアジー——彼らについては後に触れる——は彼らの特権を最も保証する組織に加わった。この組織はUGT以外にはありえなかった。それはカタルニャでは共産党の腰巾着になり下がっていて、その中央委員会は、「私有財産尊重の枠内で革命的秩序の味方である」と公言していた。

こういう次第で、UGTはカタルニャにおいて一定の重要性をもつようになった。CNTが寛容にも従属していた反ファシズム委員会の協定は、公的な事業にUGTを加えるという驚くべきことをやった。

ここに統一基本協定の原文がある。

「ファシズムに対する労働者の革命的行動をより効果的にし、先月一九日と二〇日の戦闘において実現された統一を強化し指導するために、本日、CNT代表二名、UGT代表一名、FAI代表

明するであろう。

バルセロナ、一九三六年八月一日、UGT代表アントニオ・セセ、エミリオ・ガルシア、CNT代表ホセ・ペレス・ルビオ、ファクンド・ロカ、PSUC代表ファン・コモレラ、FAI代表ペドロ・エレラ

さて、この章の締めくくりとして、ファン・ペイローの政治、経済、軍事情勢に関する論文を全文紹介する。

「現時点の革命的理解——栄光あるCNTは、今や、勇氣と堂々たる武勳に満ちたその歴史に、大いなる名誉をもたらしたと、率直に言おう。そして、まさにかかる情勢の中で、私は連合の城内にもどるのである。この帰還は、かつての態度で行動するためではなく——歳月は無為には過ぎない。そして、すでに私はその重みを感じ始めている——むしろ、全労働者が提供する義務をもっているところのものを、共有財産に提供するため、社会的利益の最上の形で獲得に向かってプロレタリアートを激励するためであると言えよう。歴史の現時点は全員の協力を要請している。なぜなら、現在は悲劇の時であり、かつまた、新生スペインの建設の時であるからである。

私の考えでは、今こそ、労働時間短縮や賃金引上げのようなプロレタリアートの社会的要求に道を開く時だと考える者は、根本的に誤っている。主な誤りはヘネラリダッド政府から出た。というのは、怠慢による無定見のために、いくつもの事件、数十年来スペインが経験した最も重大な事件が、国家経済が根底から極度に衰弱しつつあることを警告していた、まさにその時に、週四〇時間労働の確立を要求しているからである。ヘネラリダッド政府

表一名、PSUC代表一名からなる連絡委員会が設置される。
1、同委員会は、これら諸組織の問題に存在する一致点を探ることを使命とし、公的な指導と指令を出すためにそれをその討議と決定に付す。

2、この連絡委員会の創設はこれを構成する各組織の独立性には絶対に触れない。

3、何らかの問題で、各組織があらかじめその一件を討議した後、加盟諸機関が合意に達すれば、承認された諸機関の一致点を種々の委員会（民兵中央委員会、経済省、等）が遵守しようるよう、連絡委員会は配慮するであろう。

4、連絡委員会は、週三回の定例会と、同委員会を構成するいくつかの組織の判断で必要と考えられる臨時会とを行なう。

5、同委員会は、その加盟者と組織に対して、全職場においてCNTとUGTの組合員の適当な代表部を加えた工場委員会を結成することを、強く要請し勧告する。

6、この連絡委員会の創設は、両組合本部の下の諸組合の相互尊重と、労働者に対して二組合本部の一つに加入する自由を認めることを前提とする。

7、この連絡委員会が存在するかぎり、これを構成する諸組織は、あらゆる種類の攻撃と暴力的批判を放棄することを協定する。相互になされる批判は完全に友好的であらねばならない。

8、連絡委員会は新聞に覚書を発表し、労働者と一般世論に同委員会の設立と目的を知らせるであろう。

9、連絡委員会はCNT中央委員会とUGT執行委員会に向けて協定を通告し、全国段階でも同様のことがなされるよう希望を表

のゼスチャーはカタルニャ・プロレタリアートの同情を得るための効果的な一撃となることを欲したものだと、私は推測する。しかし、さらに、私は、革命的アナキストと組合員は失策を明確にし、見かけだけの、くりかえすが外見だけの太平気分分、労働者が浸り続けるのを避けるようにと、叫ぶものである。太平の底には激しい暴風が吹き荒れ、現在、前線で人民の血の惜しみない犠牲をもって回避されているとはいえ、危険に、まさに脅かされているからである。

自由のための我々の戦争は、国家経済の心臓にいた巨大な傷口であり、その傷口は、時がたつにつれ、前線の必要が増大するにつれて、ますます広がっていく。前線の必要は、生産に向けられる我々の活動とエネルギーの減少に反比例して増大するだろう。この単純な事実には私にこう自問させる。もし、必ず短時間のうちに、スペイン経済の悲劇的情況が、労働への我々の協力の増大と、八時間労働の一日一時間またはそれ以上の増産を、我々に要求するならば、どうして、労働への我々の協力を縮小することなど考えられようか？ と。我々がすでに獲得した分量さえ失うほどの水準に置かれるような原則に甘んじるのではないか？ すべての者の自由を守るために心を傾注している同志たちとともに我が共有している神聖な義務を、現在では忘れさせつつある安楽——正常時にはもちろん正当だ——への傾向がでているのではないか？ 彼ら同志たちは自由を守るためには時間の制限などない。戦わなければならない時には何時間も戦っている。一体我が同じだけのことをしなくていいわけであろうか？

ナポレオンの有名な言葉があまりに忘れられている。「戦争と

その勝利は金にかかっている。なぜなら、戦争は常に一つの経済的基盤の上に安座したからである。』であるから、武器をとってファシズムに対する戦いの前線で民兵が持っている同じ真剣さと同じ高潔さをもって戦う別の民兵の連隊が統後にいないならば、わが民兵の身辺は危険にさらされるであろう。

この機会をむだにしないことだ。民主主義ブルジョア共和国は新しい経済、社会的編成によって越えられなければならない。この凌駕は、だからといって、あわてふためいて盲滅法に、もし常に本物なら往々にして不都合と逆効果を招く自然の欲求に基づいてなされるべきではない。反対に、現在我々が生きている不安定な情勢の動揺にさらされているのではなく、スペイン経済の重大な悲劇を決定するにちがいない破産の危険にさらされている物質面の即時的回復の基礎の上に、道徳的足場をつくり、それを絶対に強化する機会を利用することだ。

現在、血の川によって保証されたプロレタリアートの社会的優位は、基本的表現をとらなければならない。労働世界の指導と運営における絶対的統制である。我々労働者は社会闘争のこの新段階において、我々の人間性を確立しなければならない。この勝利から生じる教訓を吸収しなければならない。経済と産業のメカニズムを支配しなければならぬ。そして、我々が一般経済の完全な組織をもつとき、この新経済の可能性を理解するとき、労働時間を短縮し、労働者の努力に報い、彼らの経済的必要のすべてが満足される水準に彼らを置く時が来るであろう。

今は戦闘の前線で戦っている同志のことと、ファシズムを今後永遠に打倒すること以外を考えるべきではない。これは民兵の統

が負った責任を知っていたから、社会党からヴァスコ民族主義党にいたるまで、現実には共和国を防衛している全政治勢力が代表されることを希望した。また、国土に定着しているプロレタリアートの部分も代表されるように働きかけた。提案は原則的には受け入れられたが、後になって、その最高機関はそれを拒否した。これは労働者の部分が政府内部に代表されていないという理由からである。だが、我々はみな、政府の種々の機関において協力し、代行することができると確信している……」

一〇月三〇日の新聞に発表されたラルゴ・カバリエロの『デイリー・エクスプレス』紙記者とのインタビューでは、ラルゴ・カバリエロの次の声明が明らかにされている。

「……しかし、政府内に代表されない多数の人民がある。強力なCNTのことを言っているのである。それはアナキストの生産的翼であり、UGTが社会主義者の生産的翼であるのと同様である……二ヵ月前に政府が組織されようとしていたとき、我々はCNTに協力を要請した。共同の敵に対して戦っているすべての勢力の直接の代表を政府が有することを望んでいたからである。そしてこれは、戦いにおいて我々の側にいるヴァスコ民族主義者に席が与えられた理由でもあるのである。当時、CNTは入閣することを望んでいなかった。しかし、今日では、戦闘の激化とともにそれを望んでいる。また、CNTの入閣には何の反対もない……」

九月三日付の『CNT-FAI情報』四一号は、ラルゴ・カバリエロ政府が成立した日に「政府無用」と題して『ソリダリダッド・オブレラ』に載せられた論文を発表した。

に加うるに強力で枯渇することのない経済によって獲得されるであろう。

そして経済は、労働、労働、労働の力で建設され繁栄するであろう。」

第二版の注

カタルニャ統一社会党P.S.U.C.は、一九三八年七月、公式共産党、カタルニャ社会党、UGTを基礎に結成された。UGTはその後独立を維持し、UGT全国本部から非難されることになる。

第一章 カタルニャ政府内のCNT

九月四日、ヒラル政府辞職。ラルゴ・カバリエロの率る内閣が交替する。その構成は、政治的観点から見ると、右派社会党三、左派社会党三、共和党五、共産党二である。CNTは入閣を要請されたのだろうか？ この点について我々は知っていないが、続く諸事件が説明するだろう。一〇月二日には早速コルテスが開会された。内閣総理大臣ラルゴ・カバリエロは次のような言葉で始まる演説を行った。

「諸君は私が寡黙であることを御存知だ。だから、政府の目標について諸君に簡単にお知らせするということは格別新しいことではない。前政府は、ファシズムに対して戦うすべての政党の代表を加えた政府を組織するよう、共和国大統領に勧告することを適当と考えた。共和国大統領は、この示唆に応じて、新政府を統率する名誉を私に賜った。これを受諾するにあたって、私は自分

「反ファシズム闘争にとって不可欠の要素というにはほど遠い人民戦線政府の存在は、質において、この闘争そのものの粗悪な模倣と呼ぶにふさわしい。」

ファシスト『ブッチ』の準備に対して、ヘネラリダッドおよびマドリッド政府が何一つしなかったという事実を思い起こすまでもない。権威は単に、反動分子が実際にやっていた、そして政府はその自覚したあるいは自覚せぬ道具だったところの謀略を隠蔽するためにだけ、利用された。

スペインで遂行されている戦争は社会戦争である。階級の均衡と維持に基づく中間権力の総体は、国家自体の土台がいかなる保証も見出せないで揺さぶられているこの戦争において、決定的な態度を強いることができなければならないであろう。だから、人民戦線政府は、スペインにおいては、小ブルジョア国際資本主義の間の契約の反映でしかない、正確に言いうるのである。

協定そのものの有効性からして、この契約は一時的な値打ちしか持っていないし、深刻な社会的変革によって打ちたてられた諸要求と行動方針とに事態を譲り渡さなければならないだろう。

その時には、現在、バルセロナやヴァレンシアやマドリッドの共和主義者と自由主義者の陰に隠れて行動している商人や保守主義者の厄病は消え失せるであろう。所有と外国財産の『現状維持』のか弱い番人であるこれらの政府を、イデオロギーと『革命的』政治機構に基づく強力な政府に改造しようとする理想は、革命の爆発を先に延ばすことしかできないであろう。

だから、マルクス主義の権力奪取も、日和見主義による人民の行動の自己規制も、問題ではない。『労働者国家』は革命運動の

終止符であり、新しい政治的奴隸状態の開始である。

人民戦線諸勢力との協力、企業の集産化という広い規模での食料供給の組織化は、我々の目標を獲得するために絶大の利益をもたらしている。ここに、明らかに現在の関心がある。今日までは、行政的でなく、中央集権化されず、軍隊化されない形で行なわれてきた……。これらの必要にまだ適用できる多くの完成すべきことがある。CNTあるいはUGTの諸組合は、その完成のためにあらゆる勢力を利用して、さらにもっと利用することができ。反対に、多数派と少数派の間に互いの政治生命を賭けた闘争が存在する連立政府の構造と、選良を中心とする官僚機構と、対立する諸潮流が内包する兄弟殺しの戦いとは、スペインにおける我々の解放の事業の達成を不可能にしている。これは、我々の行動力と我々の団結の意志の急速な下降、いまなお相当強力な敵に對する目前に迫った『壊走』の開始である。

我々は、スペインおよび諸外国の労働者が、この意味において、CNTとFAIによってとられた決定の正しさを理解することを期待する。国家の信用失墜は社会主義の終末である。窒息から生じたブルジョア国家の瓦解は経済的搾取によるものであって、必ずしも『社会主義』ブルジョアジーの自発的指導によるものではない。ロシアとスペインがその実例である。」

ラルゴ・カバリエロに率られた政府には果たすべき使命がある。実際、あらゆる見せかけ、あらゆる声明、雑多な処置や法令にもかかわらず、九月四日以前の共和国地区には政府は存在しなかった。共和国国家は七月一八日の軍部反乱の前に滅びたのだ。そして革命的な人民がもう一度七月一九日にそれを殺した。その蘇生は残る政府派

についていえば、事欠かないだろう。戦争の不運に對する反動として、統一された軍規と司令部の必要、すべてに優先して戦争を遂行し勝利するという至上の必要。

前述したインタビュエーにおいて、英国人記者は政府首班に次の質問を投げた。「CNTの入閣は政府の経済政策における何らかの革命の変更を意味しますか？」これに對してカバリエロは答える。

「……まず戦争に勝つこと。然る後に我々は革命を云々できるだろう。内戦は確かに社会的性格をもっている。そして、当然、戦争継続中にも経済的社会的な諸問題は起こりうる。我々はこれらの問題をCNTの協力を得て解決していくだろう。しかし、あらゆる場合にその解決は一つの目的に従属する。すなわち、戦争に勝つことである。このような時期にあっては、いかなる他の事項も我々の注意を引かない……」

カバリエロの組閣に對するCNTの反応はどうだったのだろうか？九月中旬、CNT全国委員会の提唱で地方連合全国大会が招集された。新聞に載った長文の覚書の中で重大な決定が知らされた。

「CNT地方連合大会は、反ファシズム運動の現状をあらゆる面から検討した結果、次の結論に到達した。すなわち、各勢力のより効果的な協力と、全戦線でファシズムに對する闘争を続け、かつ統後における経済的再建を保證するために各勢力を糾合しての一機関の創設とがなければ、現在おかれている状況において可能な解決はない。」

従って、CNTは、基本事項として、防衛面における指揮と政治、経済面における強化の機能を果たすための全国組織に参加することを考慮する。あらゆる意味でいかなる遅延もなく行動する

の分隊を操る迅速さにかかっている。ヒラル政府は自分の勘定で行動してきた大衆と組合との真只中のあやつり人形だった。スペイン国家の他の政府派の分隊は実体のない名ばかりの諸政党だった。

大衆は革命運動に誘われて労働組合のまわりにあり、あるいは共通の敵に直面して戦場にある。政府を、政府の土台を救うには、標語と人物とを有する威信というものを欠いている。標語は間に合わせに作れるだろう。そして人は、時を稼ぎ、目的物を手に入れたら、流れから身を引き、隠遁することもできよう。重要なのは国家の装置を再建し、政府、とにかく政府の手に、人民の武装を解き、彼らに服従させる手綱を、握らせてくれる何かを見つけて出すことなのだ。要するに革命に軍服を着せることなのだ。そのためにはラルゴ・カバリエロこそ天命を受けた人物である。労働者階級の重要な部分と、一政党、一〇月革命のおかげで破産をまぬがれた唯一の政党の左派とを代表している。党内部におけるカバリエロの急進主義的立場、UGT大衆に對する彼の個人的威信、連合およびアナキストの運動が目的として、彼自身も、彼を適任者として浮き上らせた。カバリエロは、政治的危機、彼自身の党も含めた諸政党の策略の上げ潮と退き潮の将来を推測することを知らないだろう。そして、「スペインのレーニン」はスペイン革命の最も悲劇的な時代への扉となるであろう。幅広い人民戦線政府の先頭に立つて、カバリエロは、ためつけられた共和主義体制に威信を与えるだろう。国家を若返らせるだろう。これまで実行不可能だった目的、兵力の軍隊化、武装部隊の再編成、それを政府の掌中に置くこと、統後の武装解除を、決行するだろう。それから、反革命、一党独裁に場を明け渡すために、流星のように消えるだろう。標語に

という緊急の必要を考慮して、大会に出席した代表は、世論を準備させ、以下の件を直ちに実行することを目的として、共和党と社会党との話し合いに入ることを決定する。

1、ファシズムに對して戦っているすべての政党の分子から、次の比率による防衛全国評議會をマドリッドに設置すること。UGT代表（マルクス主義者）五、CNT代表五、共和党代表四、全国防衛評議會議長ラルゴ・カバリエロ。同全国評議會の設置は、共和国大統領が本日まで遵守してきたものと同じ活動精神をもって現在の地位にとどまることを前提とする。

2、政治、経済の二つの指導面における地域、地区、地方、全国連合制と、市町村議會、地方議會、民政府の廃止に見合う同等の段階を維持する防衛評議會の樹立。地方は、周囲の事情と便宜が要請する地域的修正を導入するために、防衛地方評議會内の反ファシズム諸勢力の比率を定める権限を認められるであろう。

3、省の改変。局に変更し、当面の必要が勧告するところに従って以下を編成すること。外交、公安、軍事（空海軍を含む）、情報宣伝、公教育、財務、農業、運輸、商業、食糧、公共事業、労働、厚生。

4、公安を目的とする統一市民軍の創設。義務制の戦闘民兵隊の創設と、UGT、CNTからなる混成委員会によって構成される労働民兵評議會による同軍の統制。軍事技術者という任務と資格とに限定し、司令部を簡略化すること。防衛全国評議會によって選ばれ、ファシズムに對して戦っている三組織の代表を含む軍事行動員会を設置し、単一の軍事指導部を創設すること。

5、防衛全国評議會と、反ファシズム組合・政党諸組織との合意

で選ばれる人民裁判所と臨時司法機関の設立。

6、銀行の社会化。高利と現物投機の廃止。国、地方、地域債の断固たる追放。

7、教会、大土地所有者、大工業、大商業、運輸業一般、ならびに、反乱への支持が証明されたあらゆる規模の企業の財産の社会化。個人工業ならびに商業における労働者管理。社会化された生産と交換の諸手段の、労働組合による利用。特殊な位置にあるため、経済の正常な発展を妨げることがない町村における自由な実験。大工業ならびに最も重要な農法の計画化。

8、プロレタリアートの国際的行動に基づく平和のための闘争。外交の復活。効果的な連帯の確立をめざし、すべての反ファシスト分子の国際会議を招集すること。これらすべての点を実現するために、起案者は次のことを提案する。

(1) 大会の代表者は採択された決定をUGTに通告し、その最小限綱領に基づく全国的同盟を提唱すること。

(2) 決定事項は同時に新聞に発表すること。

(3) きたる二〇日、日曜日、これらの決定を公開し、世論の関心をその実施に向かわせるために、四つの大集会を、一つはマドリッド、一つはヴァレンシア、一つはバルセロナ、他の一つはマラガで、組織すること。

(4) 全国委員会は、各地方委員会の代表によって拡大されたうえ、UGTに関する直接交渉に入る。

(5) 一〇日以内に全国委員会の交渉を報告し、適切な決定を得るために地方大会を開くこと。

起案者の署名。レヴァンテ代表ファン・ロベス、カタルニャ代

表フェデリカ・モントセニイ、アストゥリアス代表アウレリオ・アルヴァレス」

CNTはカバリエロ政府の意義に気づいていたのだろうか？ 革命にとつて将来の危険を払いのけることを、大会の決定は指向していたのだろうか？ あるいは、防衛評議会という標語は新しい政治的事実の素因になるものではなかったのだろうか？ 事件の急激な進行はそれを肯定しているようだ。防衛全国評議会は本質的には別名をもつ政府にすぎず、また、おそらくはまさにそれを代行するものであったが、無為にして倒れた。CNTは政府参加を望んでいたが、その原則の突然の変更は緩和された。この事実が政治家と政党の目から逃れることは不可能だった。アドバルーンはラルゴ・カバリエロをあざむくことができなかった。このために、提案の性格は、どうしても短期的な協定にならざるをえない前兆である明らかなたらいを、CNTの中に出現させた。彼に都合よくという意図よりも、CNTを新しい事実に従わせ、歴史の原則を非妥協的に防衛する者たちの抵抗を打ち破らうと目論まれたのであることはわかりきっていた。

防衛全国評議会の結成に与えられていた一〇日の猶予期間が終わり、九月三〇日には予定にしたがって、キャンペーンの結果に関して検討するために別の地方連合全国大会が招集された。大会から次の宣言が出された。

「CNT地方連合全国大会は、統一人民軍、統一軍事司令部の確立のための防衛全国評議会結成に関するすでに周知の見解に対して、人民戦線諸党派ならびにUGTから寄せられた回答を審議するために、再び招集された。この最高司令機関における、平等

の権利と同一の責任とを有する反ファシズム全党派の代表を通して、労働者の勝利の確信を奮いたたせ、よって、我々を決定的勝利に導き、街頭の鼓動を収拾して社会の経済構造の現状変革に転換することによって、プロレタリアートの全的解放を目的とする進歩的發展を保証するというものであった。

この評議会の設立は、情況が強く訴えている必要事項であった。今日、再度大会を招集してスペインの現状を分析するにあたり、特に軍事行動の観点から、これまでの態度を追認しなければならぬばかりでなく、この態度は、CNTがそれらの下に評議会の提唱した諸条件の進行によって、さらに強化されてさえない。そして第二に、CNTの観点から、すでにいくつかの政党が参加しており、好ましい世論、各最高指導部で再検討され、それを代表するべき新しい機関に作り上げられなければならない世論が、プロレタリアートの間に生まれたからである。

歴史的责任——防衛の全国機関の創設を援助することができながらそうしない者たちが、歴史とその結果とに対して持つ責任は極めて大きい。時は決定的であり、巨大な圧力によってその命令を強制している。人民軍と統一司令部を創設しなければならぬ。だがその前に、指導部にすべてが参加することを保証しなければならぬ。そうすることによって、我々がファシズムに対抗して称揚する神聖なる団結は、不滅の基礎を得ることになる。この闘争にはスペインと世界の将来がかかっている。我々が倒れれば、戦っていたプロレタリアートの最後の皆は破壊されることになる。ファシズムは人民の運命の絶対の主人となるだろう。社会的解放のすべての望みは消え去るであろう。国際的に前進しつ

つあるファシズムは、スペイン・プロレタリアートの英雄的な勇気と意志の壁に突き当たった。そして、まさしくここにおいて、他の諸国の労働者から加えられることになった敗北をファシズムは蒙り、みずからの鎖を断ち切って、主人も奴隷もない新しい社会の建設の息吹をみずからの中に発見した人民の、偉大な新しい模範が歴史の前に生まれている。人民の勝利の武器である不滅の統一の創出を妨げる自殺的無理解によって、この輝かしい運命を挫折させることは、歴史への背任であって、そのせしりを受けようとする者はないことを我々は望むものである。

CNTの根——スペインは、その生命に最も重大かつ決定的なこの瞬間において、政策によってではなく、ファシストの反乱が解き放った野蛮の大波に対して前線と銃後で戦っているすべての人々の全国的ブロックによってのみ、指導される。闘争の指導部におけるCNTの量と内容を運動から排除することは、指導部そのものを党派的にし、全国的性格を剝奪し、従ってその勢力に分裂をつくるに等しい。社会改革を獲得し確保するために、スペインの現実に基づいて作成された最上の計画を持ったからには、社会主義者の新聞からさえ画期的なものと認められた提案が、即時実現されるという名誉に値しないからといって、CNTが新参で、大衆の中に根をもたない運動だということになるだろうか？ 全く逆だ。CNTはあらゆる場所で全力を傾けた。食糧と戦闘員の収集と維持に従事するスペインのいくつかの地方においては、決定的な要素である。北部、アラゴン、中部、アンダルシアの戦線では、持てる物、価値ある物のすべてを勝利のために献げて戦っている。

CNTの資格——全国的にスペインの運命を定める指揮から外されているこの連合がなかったなら、ファシズムは仮借なく電撃のごとくに勝利していただろう。ファシズムから完全に解放された地区における勝利の第一等の要素は、我々の仲間の不屈の勇気だった。他の地区においては、彼らはさらに反乱軍と戦う要素として、非常に決定的な力となった。そして現在、CNTの大半の分子でもって守り、絶え間ない勝利の連続によって維持している前線は、敵から次第に土地を奪っている。今日、この革命的情勢はCNTによるのではないのか？ 常にそうである。CNTは、唯一、労働者階級の理想を防衛することにおいて見出されるスペインの生命の、全過程を貫いている。それでは、なぜ、CNTにその資格が認められず、闘争の指導部においてそれにふさわしい当然の代表が受け入れられないのか？ なぜ、CNTは、その努力の大きさに釣りあう権利のない、単なる戦闘部隊であるしかなのか？

現実の状況から遊離して——労働者の同盟の政策でなくて、諸政党の実際の政策は、それにもかかわらず労働者が決定する状況の中で破壊した。統治諸機関は本来の民主主義的機関ではありえない。新しい機構をつくらなければならない。地域的、地方的にはそれはすでに生まれているが、国内の全地方に拡大されなければならない。そして、この新機構は、七月一九日にスペインの土台を大音響とともに襲った政治—社会的な新しい現実の上に据えられなければならない。

ブルジョア・デモクラシーの諸施設、その地域的、地方的、全国的機関は、創出された状況とかがみ合わず、社会生活の新たな息

吹きを代表することもできない。だから、実際の政策は失敗している。現実の状況から遊離しているからである。この時点の要請の真の代表は、底辺と頂上で実現されたプロレタリアートの真の同盟である。我々人民の生活に結合し再建の責任を負う真の生産者の民主主義が生まれるのは、この同盟からである。旧来の政策は、革命から生じた新しい経済的政治的諸機関から遊離している。そしてこの遊離から、勝利を無にさせる混乱が生じている。一方に中央権力があり、他方には無数の地域的地方的権力がある。これらはそれぞれの道を歩んでいる。そしてその中にこそ、すべての反ファシズム諸党派が平等の権利と義務をもって代表される防衛評議会が固く支持する全国的な表出を、見出さなければならないのである。

革命的同盟——この状況を明確に予見したCNTは、サラゴサ会議で革命的同盟を提唱した。今日、この意味でもう一度その努力をする。そして、もしCNTとUGTが理解しあわないなら、革命は道を失うだろうと考える。革命は道を失い、失敗するだろう。なぜなら、我々が直面している問題は単に武器の問題ではなく、根本的には、すべての戦う共和主義者と労働者の諸党派の間の信頼と相互の意志の疎通の問題であるからだ。

この信頼の必要を尊重して、CNTは無限の寛容を保証する。日程の完全な獲得に突進しない。なぜなら、そうすることは、統一を維持すべきブロックを分裂させることが予想されるからである。しかし、気まぐれからではなく、周囲の状況の絶対的命令によって創出された、要するに状況の落とし子である新機関から戦闘の指導部に参加する権利を、すべての者のために強く要求する。

全国的な規準——CNTがその基本条件の完全な要求という意味ではしたくないことを、他が、全国的な総括からではなく党派の規準からするならば、CNTは公然かつ断固として、生起するであろう失敗の全責任を拒絶する。そうだ。伝統と基本条件と現実の要求とに忠実に、惜しみなく全精神をもって努力し続けるだろう。なぜなら、ファシズムに対する戦いはすべてのものに優先しているからだ。そして、ファシストの攻撃がマドリッドを脅しているこの危機の瞬間にあつて、活動を倍加し、熱狂を増大し、それをすべて勝利のために献げるであろう。しかし、戦う大衆の、自己と司令部と、全国的指導機関と完全な統一と一つの契約に対する信頼とを重要な基盤とする救済、有無を言わせぬ正確な反撃は、致命的な遅れをとることなく防衛全国評議会を設立することを要求し命令しているところに言明しておく。以前の態度と、軍事情勢が強化した態度と、また、好ましい世論が設置されたとはいえ、なお大きな力を傾けている態度を追認するにあたり、CNTの大会は、緊急に、執拗に全国評議会の創設を要求し続けるであろうと宣言する。そうしないなら失敗は明らかだと考える。そして、歴史への責任をCNTは解かれるであろう。この責任は、社会救済の革命に一步を踏み出すことができながらそれをしない者たちが負うであろう。

革命的同盟万歳！ 防衛全国評議会万歳！ 人民の勝利万歳！
——労働全国連合地方大会——カタルニャ、アラゴン、リオハならびにナヴァラ、中央、アンダルシアならびにエストレマドゥラ、レヴァンテ、アストゥリアス、レオンならびにバレンシア各地方連合！

数日さかのぼって、噴火を続ける火山カタルニャに再び立とう。九月二四日、バルセロナで統一組合地方大会が開かれていた。これには三二七組合を代表する五〇五人の代表が出席。地方委員会書記長マリアノ・R・ヴァスケス同志の報告によると、この大会は、CNTが提起していた経済的諸問題の検討と、経済評議会の事業の援助のために招集された。多数の工業の集産化は良好な兆しを見せている。しかし、活動が整備され、全体の利益、国全体の経済の利益に結びつけられることが必要である。経済評議会はまさにこれに応えるものである。いくつかの産業は消えなければならず、戦闘の必要から見て、他の新しい産業が創出されなければならない。生産と消費の間に不均衡のないよう、最大の犠牲に訴えなければならない。既述の大会では、経済評議会におけるCNTの代表ファン・P・ファブレガスが次の声明を行なった。

「……全国的に、ヴァレンシアその他ファシズムが爪をたてることのできなかつた地方で、経済評議会の設立に向かっていることを、我々は大きな満足をもって見ている……。カタルニャ経済評議会が設立されたとき、二つの組合本部の間に確執が生じた。我々は、当然のことながら、連合主義と絶対自由の潮流を擁護した。マルクス主義者は中央集権主義と国有化を擁護した。集産化の考えが優勢だった。それは革命にとって最も適当で実際のだった……。七月一九日以前にカタルニャには六万五千人の失業労働者がいた。戦争と、マドリッド—バルセロナ間に存在する緊張とのために輸出することができない製品の膨大なストックがあった……。私は、マドリッド政府が押しつけた困難について諸君に報告しなければならぬ。マドリッド政府は経済と財政面における

あらゆる援助を拒絶した。明らかに、カタルニヤで実現されている実際の事業に大して共感を抱いていないためだった。カタルニヤでなされた異常な前進が、両者の間に確執を生み、我々の地方にかなり苦しい状況を生じさせる余地を与えた。マドリッド政府はカタルニヤを援助することをきっぱりと拒絶した。政府の交替がきた。だが我々は引き続き同じような困難に遭遇した。我々はマドリッドに代表団を派遣して、政府に八億ペセタの信用と戦時物資獲得のための三千万ペセタと、さらに原料獲得のための一億五千万フランの信用を要請した。この担保として、我々は貯蓄金庫がスペイン銀行に証券で保管していた十億ペセタを提供した。全部が拒絶された。理由はわからない。ことに、スペインの財政事情は世界でも最良であることがわかっているのだから……。反ファシズム思想の精神的中心、ファシズムにとつて難攻不落の要塞、最大の保証の地であるカタルニヤへすべての金を移すようマドリッド政府に要請することを、我々はヘネラリダッド政府に提案した。ヘネラリダッド政府はこれを受け入れ、全部でなくとも少なくともカタルニヤが必要とする四億ペセタの金の移管をマドリッド政府に要請した。」

この大会の議事は二四日に始まり、二六日に終った。二七日、バルセロナの新聞はCNTのヘネラリダッド政府入閣というセンセーショナルなニュースで世論を驚愕させた。この事件はすべての政治的党派の新聞が徹に入り細にわたつて解説した。CNTは、その盛衰と闘争の長い歴史で初めて、伝統ある非政治主義を放棄し、一賢明と政治的成熟」の新段階を画した。CNTの地方機関紙みずから、マドリッドの「クラリダッド」のような祝辞を掲載した。

著書『なぜ我々は戦争に敗れたか』の中で、サンティリヤンももう少し明確に告白している。

「我々は戦争で勝たなければ革命で勝つことはできないと知っていた。そして戦争のためにすべてを犠牲にした。それが戦争の目的まで犠牲にすることを意味するのに気づかないで、革命そのものまでも犠牲にしてしまった。」

そしてさらに付け加えている。

「民兵委員会は、武装した人民の最高主権を保証し、カタルニヤの自治を保証し、戦争の潔白と正当を保証し、スペインの鼓動とスペインの魂の復活を保証した。しかし、それを確保することを我々が主張する限り、すなわち、人民の力を確保することを我々が主張する限り、カタルニヤには武器が届かず、それを国外で入手するための外貨も与えられず、工業原料も提供されないであろうと、絶えず繰り返して我々は言われていた。そして、戦争に敗れることはすべてを失うこと、フェルディナンド七世下のスペインを支配したと同様の体制に逆戻りすることであったので、我々と人民によって与えられた衝撃が、中央政府の計画した軍隊化された武装部隊と新しい経済生活とから全く消えさせることはありえないと信じて、我々は、ヘネラリダッド政府に合流するために、防衛評議会と自治政府の他の死命にかかわる部門とに民兵委員会を譲つたのである。」

ヘネラリダッド評議会、すなわち政府は次のような構成になっていた。

議長(すなわち首相) ホセ・テラデリヤス(エスケラ)

財務相 同右

(同右)

「クラリダッド」は、カタルニヤの時事ニュース中、ヘネラリダッド新内閣に言及し、CNTの政府要職への参加がもつ重要性を明らかにした。CNTは——曰く——、事実はあらゆる理論的極端主義よりも教訓的であり、だからといって原則のいづれも放棄したのではなく、まさにその逆であることを理解したのである。」

一方、カタルニヤ地方委員会は、CNTが「評議会」という名の政府に参加したことが呼び起こした解釈、最も多様なニュアンスの解釈の洪水を前にして、雪辱を期してリングに上る機会だと考えた。ここにその九月二七日の覚書がある。

「カタルニヤ労働地方連合——新聞の報道員に対する説明と要請——CNTが公式な指導部と人民の利益の管理部に参加することによって開始したこの新しい段階において、カタルニヤ地方委員会は、新聞紙上の諸意見に関する批判を明らかにしたい。

常にニュースをかきつけることが——新聞業の——習性であり、多くの場合、さらに愚劣なこと、ニュースを手に入れ、ありもしないことを暴露することさえやってきた。昨日土曜日、夕刊は、同志ファブレガスとドメネチがヘネラリダッド大統領と会見して二十分間話合つたというニュースを発表した。この二人は大統領と会見したのではなく、文化相と協議したものであることを明らかにしておかなければならない。新聞にはもう一つの説明を要する。それは同時に警告ともなるだろう。すなわち、政府がつくられたのではなく、当面する事情に対応する新しい機関であり、ヘネラリダッド評議会と呼ばれるものであるということである。」

文化相 ヴェントウラ・ガソル(同右)

内務相 アルテミオ・アイガデ(同右)

経済相 ファン・P・ファブラガス(CNT)

食糧相 ファン・J・ドメネチ(同右)

保健・社会厚生相 アントニオ・ガルシア・ビルラン(同右)

公共事業相 ファン・コモレラ(PSUC)

労働・建設事業相 ミゲル・ヴァルデス(同右)

農業相 ホセ・カルヴェト(レバツサイレス—エスケラ)

司法相 アンドレス・ニン(POUM)

防衛相 ディアス・サンディノ(技師)

無任所相 ラファエル・クロサス(アクシオン・カタラナ)

CNTが参加したヘネラリダッド新政府の政策発表を、非常に長いものだが一部でも引用することは興味深いと思う。

「……評議会の当面の日程は次のとおりである。a、迅速に勝利するという目的に貢献しうる手段は、何であれ惜しむことなく、最大の努力を戦争に集中すること。統一司令部、全戦闘部隊の結合、義務民兵の創設、軍規の強化。b、国家経済の再建。この目的のために、さる八月一日の法令によって設立された経済評議会の日程を直ちに実施に移す。これは以下を内容とする。

1、消費の必要に従って生産を正常化すること。

2、外国貿易の統制。

3、地方の大所有地の集産化と小農の尊重。

4、家賃を媒介にして都市の不動産の価値を一部切り下げるこ

と。あるいは借家人に利益となるのが不都合と考えられる場合は同等の租税を定めること。

5、大工業、公共事業、輸送の集産化。
6、所有主に遺棄された建築物の接収と集産化。
7、生産物の分配における協力体制の強化。特に大量供給企業の協力体制を活用すること。

8、銀行国有化にいたる銀行取引の統制。
9、個人産業に関する労働者の管理。農業と工業のために失業者を精力的に再吸収すること。

10、農産物価格を引き上げるために、新しい農業労働組織が吸収しうる労働者を農村に復帰させること、新しい産業の創出、カタルニャの全面的電化、その他。
11、順次、可能な手段によって種々の間接税を早急に廃止すること。

c、今日まで才能あるすべての子供を抑圧してきた特権を越えて、初等学校から最高の研究にまで進めるようにする新統合学校の指導の下に、多方面において人民文化を向上させること。あらゆる文化的な発表を奨励すること。

戦争の要請、我々が属している効果的なブロック、なされつつある社会改革から生じる諸困難などは、寄生階級を富ませるためではなく新しい社会を生み出すために働いているのだという確信をもつならば、それらは労働者階級が耐えなければならぬ犠牲を要求している。我々の手には、よりよき人間性のために戦い、忍耐することを知っている人民の、無敵の武器がある。この人民が現在欲していることは、彼らに一つの方向が示されることである。人民のこの深い願望を満足させようと、評議会は、かかる時点で必要とされ、かつそれが不足しないと保証される協力と情熱

た。全員の善に帰すべき大義のために犠牲になることは極めて正当である。単に一党派を益しうるだけの理由で犠牲になることは極めて愚劣である。そして我々アナキストは、多くの理由から、過度の自信をもっているためにさえ、奉仕すると宣言したが、決して愚劣であるからではなかった。

しばらく前に——とウラレスは続ける——我々は言った。ブルジョア独裁よりプロレタリア独裁を。今や我々は叫ぶ。ファシズムの勝利より、味方ならずとも我々に近い者たちとのあらゆる協調を、と。これはアナキストに聞かせるためではなく、ファシズムに対して戦うすべての者に聞いてもらうために言うのである。共通の危険と、歴史がスペイン人民に予定した使命とを我々は負わなければならない。すべての反ファシストはこの時期にあつて高潔であらねばならない。我々の手中に世界の自由の救済がある。我々是我々の胸によって、我々の忠誠、我々の寛容によって、それを救わなければならない。我々にとって、我々全員にとって、最悪中の最悪は、絶対自由主義に対する国家共産主義の勝利ではなく、国家共産主義に対する自由共産主義の勝利でもなく、まして富の共有と集産化を保証し承認する連邦共和国の勝利でもない、ファシズムの勝利であることを考えて、ひたすらこの勝利を阻止するために、我々は、今日ファシズムの危険が存在する限り、我々の行動を対抗させなければならない。」(『ソリダリダッド・オブレラ』一九三六年九月二九日)

ヘネラリダッド政府の成立は民兵委員会の解消を伴っていた。ヘネラリダッドと民兵委員会に代表される権力の二重性の中で、前者が勝利したのである。政府の宣言に従って、「不服従者」(公式の命

を要請する。団結は勝利であり、勝利はそれを努力して得る者の栄光であり、我々の子孫の最も幸いな未来である。

ここで我々は社会正義に基づいた新秩序を建設しつつ、前線では、アラゴンの貴重な大地からそれを蹂躪した敵を追い出し、ファシズムに対する戦いと人間の人間による搾取が永久に廃絶されたよりよき社会とのために、イベリアの他の人民へ我々の協力を提供し続けるであろう。

評議会は宣言する。爽り豊かなカタルニャ労働者の努力を尊敬し支持する。特に農民に対して言う。その労働は奨励される。自分たちが所有し、みずからの汗で耕作している一片の土地のために恐れる必要はない。新秩序はその労働の成果を尊重するであろう。だが、体制の敵である土地所有者の農園は、接収によって仮借なく攻撃されるであろう。また、農民を圧迫していたすべての賦課と義務は廃止されるであろう……」

連合とアナキストの陣営自体の解説の中で、フェデリコ・ウラレスの論文の次の一節は特筆に価する。

「CNTとアナキストは政治家ではない。しかも現在、政治の府の指導部に参加すると宣言することによって政治家たらんと欲している、ということは、君を怒らせるかもしれないが、ブルジョア社会において道具であり家来であり奴隷であり、黙々として働き、物言わぬ者であった賃金労働者が演じた役割を、我々リバタリアンが演じなければならないことである。アナキストは政治家だった。スペインと運命を共にすることを願う時にはなく、その運命を支配するために銃をとる時に、そうだったのである。その時には、それに正面から立ち向かう者はいなかった。」

令に頑強に抵抗する者たちを特に指したあだ名)に対するスローガン闘争、強力な軍規の必要と統一司令部とが急きょ開始された。

ドウルティのまぎらわしい言葉が明らか反革命の標語にすりかえられて極端に表現された。「我々は勝利以外のすべてを拒絶する」。
ドウルティはバルセロナにおり、後にあの大きな政権持ち回りの頃はマドリッドにいた。すでにファシスト軍に包囲されていたスペインの首都にあつて、アラゴン戦線のさし迫った必要を政府に提議するために旅をしてきたドウルティは、マドリッドの新聞に次のように発表した。

「私の部隊に関しては私はそれに満足している。我々は戦争と革命を同時に行なっている。革命的方法は単にバルセロナでとられているばかりでなく、火線にまで達している。我々が征服した村はみな革命的に発展し始めている。私の部隊の後退はとにかくものすごいものだった。なぜなら、我々の退却はどんな軍隊のそれとも似ていなかったからだ。我々是我々が通過した村々の全住民を我々といっしょに連れ去らなければならないなかった。火線からバルセロナまで。我々がたどった道には戦闘員しかいない。世界中が戦争と革命のために働いている。これが我々の力である。軍規に関しては、私としては自分と他の者の責任を尊重することではない。私は兵営の軍規には反対している。しかし同時に、卑怯者が危険を避けるために常に訴える誤った自由にも反対である。戦争にあつては代表者は従わなければならない。そうではないければいかなる作戦も行なうことはできない。私の部隊では大戦争のあらゆる残酷が生じた。瀕死の母親、出産した女の同志、病

気の子供、目の悪い者、等々。しかし、私はそれぞれの傷病を診察する衛生班をもっている。うそをつく者は銃とつるはしの二重の労働を持つことを知っている。気をくじくような手紙はくずかご行きだ。気まぐれで来たように気まぐれで行きたいと言いはって家に帰りたいが者には、多少考慮してから、徒歩で家へ帰るよう命じる。ほとんどこんな極端なことにはならない。正直に言って、私は私に従っている同志たちに満足している。」

さて、ドゥルティについて、軍規と精神的強制についてふれたから、八月二〇日にマドリッドの『インフォルマシオネス』に発表された記事の數行を引用するのが当然だろう。これがそれである。

「場所はどこでもいい。みずからの自由を守るために武装した人民の勝利を印す多くの場所の一つである。新しい征服に出發する直前、戦闘員がほとんどみな人民広場に集まっていたとき、数人の民兵がドゥルティの前に捕えた五人の同志を連れてきた。彼らは何かを略奪したところを誰かが見つけたのだ。取られた物の値打はわずかなものだったが、その罪は、人民軍が村に滞留している間これらの盗人に宿を供したおとなしい家庭で犯されたために、実に憎むべき性格を帯びていた。犯された行為の低級さで、ドゥルティの目は怒りに燃え、声は憤りに震えていた。ドゥルティは罪人たちに向かって言った。

『武器を渡せ！』力強く命令した。そして震えながら引き渡しに応じている者の前で続けて言った。

『立て！ お前たちに盗む勇気があったのなら、死ぬ勇気もなければならぬ！』

この言葉は被告人たちの顔をむちで打ったようだった。彼らは

最後の審判に従うようにみな同じ動作で頭を上げ、死を受けるために最後のりりしい態度で胸を張った。

『今度は、今度だけは許された。二度と繰り返してはいけません。民兵は泥棒ではないのだ。』

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接購読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝で『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京Ⅱ文献堂、ウニタ書館、麦社、川崎Ⅱ甘露書房、仙台Ⅱ八重洲書房、名古屋Ⅱちぐさ正文館、十月書房、京都Ⅱ三月書房、京都書院、ふたば書房、大阪Ⅱ曾根崎書房、北九州Ⅱ未来書房、札幌Ⅱアテネ書房

編集後記

秋山清「文学のアナ・ボル論争」は、これまで伝説的に語られてきたアナ・ボル論争の実際について、はじめて具体的な資料を駆使して究明していった力作である。

秋山がここで繰返し力説しているように、このアナ・ボル論争は、なから文学論争ではなく、イデオロギー論争であり、それが文学論争とみられたのは、ただ論争者がいずれも、文学者であったからにすぎなかった。だが、この論争に関していえば、彼らはいずれも、文学者としてではなく、政治運動者ないしはイデオログとして発言しており、そのことをすこしも不思議としていない。ここに混濁の源がある。

◇ ジョージ・オーウェルは、政治的に反対であるからという理由

で、ある作品を排撃したり、機関銃をつきつけてつぶしてしまふのは、まだ許せる、しかし政治的に反対であるゆえに、ある作品の価値を全く認めないというのは、許し難い、という意味のことを語っている。

文学の政治への従属、思想の政治への従属は、全体主義の本質であろうが、この傾向は、さらに屈折した、隠微な形を取って今日、一般化しているように観測される。ということは、逆にいえば、一九二〇、三〇年代に原初的な形で台頭した全体主義が、六〇年代、七〇年代を通じて、一層、完成されたものとなりつつある、ということではな

いか。
古い、既成のレンズにしがみつき、それを通して現実を見ていると、われわれはとんでもない間違いを犯かすのではないか、「岐路に立つ人類」という言葉が、決して大ききなうたい文句

ではなく、本当に身につまされるものとして響いてきはしないか。

◇

長谷川進「ブルードンと現代」は、長谷川氏の都合で一号休むことになった。次号で、ブルードンの現代における意味が論じられることとなっている。

また、内村剛介「トロツキー『赤軍史』に寄せて」は、すでに問題提起の役割を了えたので打ち切り、次号から、「スターリン治下のアナキストたち」を連載する。ソ連文学者と、ホイットマン、ワイルドラのつながりにスポットをあてつつ、アナキズムを語る、という趣向である。併せて期待されたい。

◇

品切れで読者に迷惑をかけているので、九号から二百部ほど余分に刷ることにした。一一八号まで品切れ、九号は残部がある。

黒の手帖 第十号

一九七〇年十月二十五日

発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)郵便番号一六二
電話二六〇局・八五二七
振替・東京一〇二四六五
印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇
電話三六三局・五一二二

定価・二〇〇円

送料・四五円

二号分前納・四五〇円
四号分前納・九〇〇円
(いずれも送料共)